

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. **31**

2026.03

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.



【写真】共和町マルシェの様子

CONTENTS

- 01 **特集** 未来に引き継ぐ大自然「国立公園」を活かした地域づくり
～日高山脈襟裳十勝国立公園での取組～

事例紹介

平取町／「幌尻岳登山」と「アイヌ文化」を織り交ぜて ～国立公園を追い風とした地方創生の取組～

十勝・日高山脈観光連携協議会／国立公園の多彩な体験と発信による魅力の再発見 ～広域連携による地域活性化の取組～

知事が地域訪問する機会に地域で活躍されている方をお訪ねし、その様子を紹介

- 05 **地域が動く・プロジェクト最前線**

長沼町「ながぬま地域起業塾」による地域課題解決

～「ながぬまローカルチャレンジエコシステム」の創出を目指して～

- 07 **地域のキーパーソン**

共和町／松本 和哉さん

中標津町／株式会社ふるさと開拓ラボ

- 09 **地域を創る人づくり**

北海道立北の森づくり専門学院

～旭川から全道へ若い力で林業・木材産業を支える～

- 11 **「なおみちカフェ」から
～地域創生のヒントを探る～**

根室編 KOBUSTAY

空知編 三笠水素製造プラント

地域に新たな風を吹き込む

- 13 **地域おこし協力隊へのインタビュー**

～若者や女性に選ばれる北海道に向けて～

地域おこし協力隊座談会



特集

未来に引き継ぐ大自然

「国立公園」を活かした地域づくり

日高山脈襟裳十勝国立公園での取組



▲北海道の南端にある「襟裳岬」から望む広大な水平線

国立公園ってなんだろう？

日本の国立公園は、我が国を代表する自然の風景地として、自然公園法という法律に基づいて国（環境省）の指定を受け、管理されています。全国で35箇所が指定されていて、57箇所ある国定公園、300箇所を超える都道府県立自然公園とともに日本の自然公園のネットワークを作り、その中心となっています。国立公園は開発の波から自然を守り、自然とのふれあいの場として誰もが利用できる場所であり、年間約3億人もの方が訪れています。

国立公園のしくみは？

国立公園の中には、ほとんど人の手が加わっていないところもあれば、集落や観光地として開発されているところ、農業などの産業に使われているところもあります。そこで、その土地の自然の状態や使われ方によって、公園内を細かく分け、どのように保護していくか定めています。また、利用者などのように自然に親しんでもらうかを考えた上でどこに道路や山小屋などの施設を造るか定めています。

日高山脈襟裳十勝国立公園の指定

エゾナキウサギ、シマフクロウ、ゼニガタアザラシなどの希少な野生生物の重要な生息地であることに加え、日高山脈特有の氷河遺存種や固有植物群が植生するなど、生物地理学的に高く評価されたことから、令和6年6月25日、道内で7箇所目となる新たな国立公園として「日高山脈襟裳十勝国立公園」が指定されました。この公園は、245,668ヘクタール（東京ドーム52,500個分）と国内最大の陸域面積を有し、南北約140kmにわたる日高山脈やホルン（先鋒）などの典型的な氷河地形を含む特徴的な地形が広がっています。また、地表で連続した地質断面を観察できる点も魅力のひとつで、原生的な冷温帯林、高山帯植生、砂丘や海浜植物群落、湿地・湧水地など、多様な生態系が連続的に分布していることも評価されています。

こうした価値を国内外の多くの方に知ってもらうとともに、新たな地方創生の起爆剤として活用していくため、関係する市町村での取組が活発化しています。



▲幌尻岳（平取町）

標高2,052mを擁し、その圧倒的な原生自然と、日本百名山の中でも最難関といわれる挑戦的な魅力が、多くの登山家を惹きつけている。

アイヌ文化を学び、アイヌ民族が持つ自然観や精神性、幌尻岳が神聖な山であることを理解して登ることで、単に山登りを楽しむだけでなく、神社やお寺を巡るような目線でも楽しめるようになり、また、そうすることににより、登山者自身の自然・文化を守ろうとする意識が醸成され、将来的な自然環境や文化の保護にもつながっていくといえます。

こうした理念の下で、平取町では登山



▲幌尻岳登頂記念手ぬぐい

Tシャツなど他のグッズもあります！

期待が寄せられています。

また、最近では、二風谷コタンで、人気マンガ「ゴールデンカムイ」の実写版映画の撮影が行われ、聖地巡礼として多くのファンが町を訪れるなど、平取町の魅力が世界に向けて発信されています。町の担当者は、この勢いも活かしながら、さらに町へ人を呼び込んでいきたいと意気込んでいます。

国立公園を追い風に、登山とアイヌ文化を織り交ぜた平取町の取組へ、大きな

かねてより人気のある幌尻岳登山とアイヌ文化を掛け合わせた、平取町独自の取組について取材しました。

日高管内 平取町の取組

国立公園を追い風とした地方創生の取組

国立公園を追い風に

平取町では、町内にある「幌尻岳」を含むエリアが国立公園に指定されたことを追い風に、登山客の誘客やアイヌ文化振興の取組を加速させています。

特に、平取町のふるさと納税返礼品である「幌尻岳ガイド付きプレミアム登山」は、国立公園指定を受けて、予約がすぐに埋まるほど人気に拍車がかかっています。

幌尻岳ガイド付きプレミアム登山

著名な登山家や平取町山岳会がガイドを務め、山荘で「びらとり和牛」などが味わえる平取町のふるさと納税の体験型返礼品ピラ！

なお、この取組で得た寄付金の多くは、自然保護活動や登山道整備など幌尻岳に還元されてるピラ！



平取町公式キャラクター
ピラッキー

アイヌ文化で価値ある登山を

近年、人気の登山スポットとして多くの人を訪れる幌尻岳ですが、アイヌ民族からは「神が住む山」として信仰の対象とされており、かつては「神に遠慮して登らない山」とも言われていました。

町の担当者は、こうした背景を踏まえて「幌尻岳は、アイヌ文化を学んでから登ることで、その登山の価値をより高めることができる」といいます。

アイヌ文化を学び、アイヌ民族が持つ自然観や精神性、幌尻岳が神聖な山であることを理解して登ることで、単に山登りを楽しむだけでなく、神社やお寺を巡るような目線でも楽しめるようになり、また、そうすることににより、登山者自身の自然・文化を守ろうとする意識が醸成され、将来的な自然環境や文化の保護にも

誘客とアイヌ文化振興を1セットと捉え、登山客を事前にアイヌ文化施設に案内するなど、登山客がアイヌ文化に触れる機会を増やすことにも力を入れています。

国立公園化から1周年

町や町山岳会では、令和6年の国立公園指定以降、国立公園PR看板の設置や登山道整備、登頂記念Tシャツや手ぬぐいなどのグッズ制作などの取組を進めてきたほか、令和7年8月には、国立公園1周年記念として、登山歴50年以上の登山愛好家としても知られる俳優・ナレーター石丸謙二郎さんを招き、トークショー&記念登山を開催しました。

トークショーでは、登山に造詣が深い石丸さんから、トークのほかにピアノ演奏も披露され、来場者は終始魅了されました。また、記念登山でも、参加者は事前にアイヌ文化に触れ、意義深い幌尻岳登山となった様子がうかがえました。

国立公園化から1年以上が経過しますが、平取町では、新しい企画を次々と打ち出しています。

さらなる人の呼び込みへ

現在、国や近隣自治体等では、国立公園の活用について協議が進められており、登山より気軽なロングトレイルなどの可能性も検討されています。登山やロングトレイルは、外国人にも一定の人気があるため、町は、外国人観光客の取り込みも視野に活用していきたい考えです。

また、最近では、二風谷コタンで、人気マンガ「ゴールデンカムイ」の実写版映画の撮影が行われ、聖地巡礼として多くのファンが町を訪れるなど、平取町の魅力が世界に向けて発信されています。町の担当者は、この勢いも活かしながら、さらに町へ人を呼び込んでいきたいと意気込んでいます。

国立公園を追い風に、登山とアイヌ文化を織り交ぜた平取町の取組へ、大きな



▲アイヌ民族の家「チセ」（二風谷コタン）

各チセの東側には祈禱を行う祭壇があり、幌尻岳山頂を向いていると言われている。



芽室町 めむろ駅前プラザ「めむろ一ど」から見た日高山脈



▲お話を伺った十勝・日高山脈観光連携協議会事務局(芽室町) 栗城さん

協議会のなりたち
 十勝・日高山脈観光連携協議会は、日高山脈襟裳国立公園の国立公園化が予定されていることを見据え、国立公園の想定エリア内に位置する十勝側の6自治体(芽室町、帯広市、清水町、中札内村、大樹町、広尾町)が連携し、魅力ある自然資源等の洗い出し、広域的な観光ルート開発やイベントの企画・開催などに取り組みことを目的に令和4年度に発足しました。
 「普段、振興局からの声がかけて一緒に参加することはあるが、市町村自らの発案で協力するというのはあまりなく、今後も続けていければ。」と事務局の栗城氏は広域連携の可能性について語ってくれました。

協議会のなりたち

国立公園化に向けた取組

協議会は、外から訪れる人だけでなく、地域住民にも日高山脈の価値や魅力を知ってもらうことを意識しながら国立公園化前から取組を始めました。
 十勝管内6市町村に点在する日高山脈のビュースポットや観光スポットを整理し、それぞれの特性が伝わるよう、パンフレットや動画の制作を行ったり、アウトドアブランド・メンバーが展開する「メンバーフレンドエリア」に「十勝・日高山脈」として登録し、ウェブサイト等を通じた情報発信を行いました。
 また、日高山脈にゆかりのある人々へのインタビューをまとめた冊子「無二」を制作し、十勝観光連盟のホームページ内に特設ページを設けるなど、継続的な情報発信に取り組んできました。



十勝観光連盟HP「無二」特設ページ

十勝・日高山脈観光連携協議会の取組
 国立公園の多彩な体験と発信による魅力の再発見
 ～広域連携による地域活性化の取組～

日高山脈遊覧フライトツアー

国立公園化の1年前にはなりませんが、本協議会初の体験型事業である「日高山脈遊覧ツアー」を行いました。

この取組は、JALの発案によるもので、HACチャーター便で普段飛ばない経路を遊覧、日高山脈を違った角度で触れることで新たな魅力を知り、きっかけとするものです。フライト中には環境省職員からの日高山脈に関するお話があったり、JALのふるさとアンバサダーからの街の紹介などがあり、地域に興味を抱いてもらえるような仕掛けも盛り込みました。

翌年にはHISからの声かけでJALとはまた違った経路で日高山脈を上空から見るといふ事業を行い、参加者の日高山脈を満喫する姿が見れた良い取組であったと実感しています。



▲日高山脈フライトツアーの様子

ガイド人材発掘・育成イベント

国立公園化後、観光ガイド人材不足の解決の一助を目的として、ガイドになりたい人や興味がある人を対象とした人材発掘・育成のイベントを実施しました。

令和6年度に2回開催し、1回目は現役ガイドや環境省職員の話を聞ける機会を作り、2回目にはワークショップを加え、一班に一人ガイドを入れて、直接話が聞けるような形にしました。

この取組により、参加者は知り合った現役ガイド等に相談することで、自らがガイドを始めるまでのハードルを下げるのが可能となり、また協議会としては、参加者の連絡先を知っておくことで、多くの人へイベント情報の周知が可能になるなど、新たなつながりを生み出すような効果も期待できるため、今後も続けていこうと考えています。



▲ガイド人材育成・発掘イベントの様子 (R7年度第一回)

広域モニターツアーの実施

協議会のモニターツアーは、国外の旅行業者やツアープランナー、万博のインストラクターなどのツアーに詳しい人を対象に実施しており、6市町村の有名どころではなく農場などの自然を感じられる場所も巡りながら、日高山脈の魅力を体感してもらい、将来的な観光ツアーの造成につなげることを目的としています。

ツアーの行程づくりにあたっては、山岳登山を主とするのではなく、日高山脈から流れ出る水が地域の産業や食、住民の日常の営みにどのように関わっているのかなど、目の前にある自然風景と地域資源、暮らしとの関係がストーリー性のある体験として伝わるような構成を重視しています。

また、「景色」「アウトドア」「食」「生態系・地質」「文化・歴史」「暮らし・生業」といった切り口でテーマを設定し、体験型のイベントを用意するなど、参加者が日高山脈と地域の魅力を多面的に捉えられるよう工夫しています。

ツアー終了後には参加者から専門的な視点からの意見や感想を得ており、これらは今後の観光客向けツアー造成に反映していきたいと考えています。

今後に向けて

協議会では、これまでの取組を通じて整理してきた観光コンテンツやガイド人材の情報を活かして、ホームページに特設サイトを作成し、動画による情報発信を行っています。あわせて、DMO（観光地域づくり法人）や旅行会社とも連携しながら、ツアー造成や商品化、受入体制の整備など、本格的な観光客誘致に向けた検討を重ねています。

フライトツアーやモニターツアー、人材発掘の取組は、すぐに成果が表れるものではありませんが、今後も、6市町村が得られた知見を共有し取組を継続していくことで、日高山脈と地域の魅力をよりの確に伝えることができ、足度の高いサービスの提供につながっていくことが期待されます。



▲モニターツアーの様子(令和7年度)



▲東京で行われたキックオフイベントの様子



▲長沼町の町章
中央はローマ字のNを形どると共に特産の粉を表しています。



▲現地視察（フィールドワーク）の様子

長沼町は、これまで企業誘致に力を入れてきましたが、町のさらなる活性化のためには、単純な企業や人の数だけでなく、まちづくりそのものに関わる人をいかにして増やしていくか、それに向けた取組を進めていくことが重要なのではないかという考えに至りました。また、ここ数年は移住者から

ながめま地域起業塾とは

そうした課題の解決に挑戦する町の取組「ながめま地域起業塾」について取材しました。

長沼町の概要と現状

長沼町は空知管内南部に位置する人口約9,800人の町で、東部にはなだらかな丘陵地帯が広がり、西部は見渡す限りの平野が続く緑豊かな田園文化都市となっています。ながめま温泉や道の駅マオイの丘公園、ファームレストランなど、地域資源を活かした多くの観光施設を有しており、農家での農業体験など、農村と都市の交流を目的としたグリーンツーリズムにも力を入れています。他の市町村同様に少子高齢化や人口減少が課題となっています。

起業する方が多いことや、移住イベント等で北海道への移住を検討している方やキャリアアプレンティス制起業したい方が一定数いるとの情報を得ていたことから、町づくりに関わってくださる人材を集める手法として「ながめま地域起業塾」が企画されました。

起業塾は、長沼町へ移住したい方や起業したい人に対し、行政、地域おこし協力隊、地元支援組織、町と関わりのある企業がタッグを組んで、募集することに決めるテーマに沿った支援を行い、地域課題の解決に取り組む人材を発掘・育成することを目的としています。この取組を継続的に高い情報発信で広げていくことで、あらゆる人に挑戦したいという気持ちが芽生え、町の発展のための取組への挑戦が連鎖する「ながめまローカルチャレンジエコシステム」の創出を目指しています。次頁からは起業塾での取組について掲載します。



▲起業塾の公式アカウント（インスタグラム）

ながめま
長沼町

「ながめま地域起業塾」による地域課題解決

「ながめまローカルチャレンジエコシステム」の創出を目指して

テーマは
「観光 × AI
× ローカル」

長沼町は札幌圏から距離的に近いこともあり、観光に関しては長年日帰り客がメインとなっていました。ここ数年で町内に民泊などの宿泊施設が増えてきたこともあり、宿泊型観光へのシフトチェンジを模索していました。

長沼町に宿泊したいと思える魅力的なコンテンツは何か、町の外からの視点も取り入れていくべきではと考え、長沼地域起業塾の参加者や事業者からアイデアを募ることを期待しました。また、「AIをテーマに組み込んでみて面白いのではないか」との町内企業からの提案も取り入れて、「観光 × AI × ローカル」を令和7年度に初めて募集する起業塾のテーマとすることにしました。

しかしながら、町役場や（一社）まおいのはこ、地域おこし協力隊等の起業塾設立・運営メンバーには、起業の専門スキルやノウハウ、アクセラレータープログラムの動作経験が皆無だったため、「常に試行錯誤・苦労の



▲取材にご協力いただいた長沼町役場政策推進課 一般社団法人まおいのはこ 長沼町地域おこし協力隊 高田係長（左）坂本さん（中）金山さん（右）

連続でした」と長沼町政策推進課の高田係長は立ち上げまでの準備期間を振り返っていました。

ながめま地域起業塾の
人気とプログラム

昨年9月に東京で開催されたキックオフイベントには70名以上の参加があったことから、11月からの本募集もある程度の人気はあるのではと期待が持てました。



▲【起業塾第1回目】Web研修で現地とオンラインのハイブリッド形式で開催。町関係者と塾生の自己紹介の様子



▲【起業塾第2回目】観光施設であるキャンプ場を視察

募集を開始すると、8名の定員に対して20名と倍以上の応募があり、その半数以上が道外からの応募者でした。移住や二地域居住、キャリアチェンジに関心のある層が応募者のメインと予想していましたが、実際には企業に勤めながらの自身のスキルアップや地域活性化・地方創生に関心のある方の応募が数多くありました。プログラムに4回の現地研修を設定したことで、参加のハードルを高くしてしまっただけかと危惧していたのですが、町役場の予想を遙かに上回る嬉しい誤算となりました。

実際のプログラムは、町役場の職員だけでなく、地域の実情や課題を把握している地域おこし協力隊や町にゆかりのある企業が、観光、AI活用、事業計画、財務、資金調達、地元事業者とのマッチングなど、様々な面から塾生をサポートする仕組みとなっています。現地研修では町の雰囲気や存在を感じてもらうことに重きを置きつつ、地元事業者との交流を図れるフィールドワークも設定しました。

2月の最終プログラムでは、塾生が自らのアイデアを披露するピッチコンテストが開催され、町の魅力や課題を踏まえ多彩なアイデアが発表されました。優秀なアイデアはサポート企業からの協業や投資を受けることも可能になっています。単なるアイデアコンテストとして終わるのではなく、将来に向けて塾生と地域の人々との繋がりが

が作られるような仕組みとなっていることが特徴です。

長沼町の地方創生

ながめま地域起業塾の取組に対して、町は塾生からの魅力的なコンテンツの提案や、町で新たに活動するプレイヤーが生まれることにとどまらず、関わった町民や事業者にも、「自分たちも何かやってみよう」という意識の変革が広がっていくことに期待を寄せています。地域事業者との協業促進、雇用の創出、地域コミュニティの活性化など、地域にとって好ましい影響を生み出すようなプロジェクトになることを目指しており、そこには長沼町をチャレンジしている地域や人にさらに人や企業が集まるような好循環が生まれる町にしたいという思いがあります。

長沼町は今後も「ながめま地域起業塾」の取組を通じて、持続可能なまちづくりを目指していきます。



▲【ピッチコンテスト】司会を務める高田係長と会場を訪れた町民

地域のキーパーソン

地域を創る人 編

きょうわ
共和町

松本 和哉 さん

共和町道の駅プロジェクト 町民と共に進める交流拠点づくり

踏み出した第一歩

松本さんは札幌市出身で食品関連メーカーの営業として活躍していましたが、生まれ育った北海道で地域活性化に関する仕事をしたという思いを強くしていた最中に共和町道の駅プロジェクトの存在を知りました。

当初、共和町には具体的なイメージを持っておらず、らいでんスイカ、らいでんメロンの産地であることも十分に結びついていなかったと話します。

「良いアイテムがあるのに発信力が弱いのはもったいない」と感じる一方で、「あまり知られていないからこそ伸びしろがある町」だと捉え、町の魅力の発信の基盤となる道の駅づくりに意欲を持ち、転職と共和町への移住を意思しました。



▲株式会社とものぼ 執行役員 松本 和哉さん。地域資源の掘り起こしから道の駅の開業準備・運営まで幅広い業務を担う。

次世代につないでいく、町の魅力づくり

移住後は地域おこし協力隊として活動を始め、町民からは、町に新しい風を吹き込んでくれる存在として、多くの期待が寄せられました。

プレッシャーを感じながらも、町に新しい楽しさを生み出したいという思いがイベントづくりなどの活動の大きな原動力になったと話します。

共和町では冬のイベントが少なかったことから、家庭で作ったアイスキャンドルを持ち寄る参加型イベント「アイスキャンドルナイトinきょうわ」を2年連続で開催しました。

他にも、ハロウィンやクリスマスなど、季節のイベントを通して、町民が交流できる場をつくってきました。

道の駅運営に関する中学生とのワークショップにも力を入れており、「将来は町外で働きたい」と話していた生徒も、特産品づくりのアイデア出しや、道の駅運営を想定したロールプレイなどを通じて意識が変わり、町への関わりに前向きになっていったといいます。

次世代に町の魅力をどう伝えるかも、活動の大きなテーマになっています。

日常の交流から広がる町全体の参加意識

令和4年には道の駅運営会社である株式会社とものぼが設立され、令和6年には道の駅開業前アンテナショップ「とものぼショップ」の運営が始まりました。

同ショップには、町外からの来訪者や帰省中の町民など、様々な人々が訪れ、町の新たな魅力発信の拠点になっていると松本さんは話します。

ガチャガチャを置き、子どもも気軽に遊びに来ることができる空間づくりを行うなど、日常的な交流が自然に生まれる場になるような工夫をしています。

こうした積み重ねが、道の駅開業に向けた「町民全体の参加」につながっています。

町民と共につくる道の駅 未来へ向けた挑戦

令和9年開業予定の道の駅には、ショップ、レストラン、温浴施設、キャンプ場、屋内遊技施設、24時間トイレ、交通情報の発信など、充実した機能が整備される計画です。

松本さんは、町民全員が主体的に道の駅づくりに関わり、一人ひとりが自分事として考えてもらうことを大切にしていると話します。

町民にとつての憩いの場でありながら、小樽とニセコの間地点として、町民と町外から訪れる人々が自然に出会い、交流できる道の駅づくりを目指して開業準備を進めています。



▲松本さんが企画・運営をおこなったアイスキャンドルナイトinきょうわ。幻想的な灯りが広がる。



▲道の駅開業前アンテナショップ「とものぼショップ」店内。松本さんが開発に携わった共和町の農産物を使用した特産品など、多様な商品が並ぶ。



▲道の駅の外観イメージ。地域の魅力発信と憩いの場の創出を目指した設計となっている。

地域のキーパーソン

地域を創る企業 編

なかしべつ
中標津町

株式会社
ふるさと開拓ラボ



中標津町から始まる、
新しい地方創生のかたち

中標津町とのつながり

㈱ふるさと開拓ラボは、中標津町出身で東京の人材サービス企業(㈱ネオキャリア)で代表を務める西澤氏が、地域の魅力向上や活力ある町づくりなどに取り組みため、令和7年1月に新たに立ち上げた企業です。元々買い物や医療など道東の生活拠点を担う中標津町に高いポテンシャルを感じていた中、㈱ネオキャリアの設立25周年を機に、生まれ故郷のために何かできないかと考え、地方創生の拠点とするために設立しました。そうした経緯もあり、中標津町と㈱ネオキャリアは、令和7年2月に持続可能な地域社会の発展と新たな地域活力の創出に寄与することを目的とした包括連携協定を締結しています。

町で初の取組

地方創生を掲げ、令和7年5月に東京都から移転した㈱ふるさと開拓ラボですが、当初は町内の人脈やプロジェクトなど全く何もない中でスタートでした。そんな中、「中標津町で音楽フェスをやりたい」と熱意を持った方と社員との偶然の出会いをきっかけに、社の初事業として音楽フェス開催に取り組みこととなりました。

西澤氏から現地での差配を任された開拓ラボの西代表は「この初事業は何としても成功させる」との強い思いで取組を進め、町民や町役場とのつながりを創りながら、学生等も含めて運営体制を構築。50日という短い準備期間でしたが、6千人もの参加者を集め、混乱もなく無事に音楽フェスを成功させました。

これを機に、町内での㈱ふるさと開拓ラボの認知度が高まり、町民との関係性も深くなっていきました。

地域活性化の取組

音楽フェス終了後、新たに2つのプロジェクトを開始しました。

1つ目は、地域情報サイトの作成で、中標津町には、どこに何があって、どんなグルメがあるのかなど、観光情報が一

切ないことに気付き、そのことが根室中標津空港の利用客が、そのまま市町村へ流れている一因でもあったことから、町内の魅力的なスポットの情報を集め、ウェブでの公開が続けています。

将来的には、二次元バーコードを読めば、町のイベントや美味しいお店など、タイムリーな情報が分かるようなプラットフォームを構築したいと考えています。

2つ目は、ジョブインサイドプロジェクトで、㈱ふるさと開拓ラボに所属する「地域おこし協力隊」の社員が町内企業に2週間入り込み、その中で企業の課題を発掘して解決につなげたり、AIの活用方法の提案や導入支援など、幅広い企業支援を行うものです。

具体的には、酪農業のマニュアル作成に着手しており、実際に酪農家が働く様子を撮影してマニュアルを作り、酪農業への参入の敷居を低くすることで、経験がない人でも、すぐに働けるように取組を進めています。



▲音楽フェスの様子

北海道東部に位置し、根室中標津空港を起点に、「道東の玄関口」として地域の交流や賑わいを生む役割を担っている中標津町。
中標津町の発展を目指して役場とともに取組を進めているのが「㈱ふるさと開拓ラボ」です。

㈱ふるさと開拓ラボの今後

㈱ふるさと開拓ラボは、地域プランディング事業や地域ソリューション事業、BPO事業なども抱えており、令和7年度中には、これらの事業の基礎を作り、体制を強化していきたい考えです。

特に、ジョブインサイドプロジェクトは、現在は2週間という短期間で実施していますが、今後は長期的な運用へ移行し、多くの道内企業が抱える人材不足、業務整理の難しさ、DXへの理解不足などの課題を解決していきたいと考えています。

西代表は「町が発展しなければ、ビジネスも生まれません」という考えの下で、まずは地域で継続的に事業を進めることを最優先に据えて、地域と企業の双方一体的な成長を目指し、中標津町が道東の代表となつて、楽しい人が集まる町にしていきたいと考えています。



▲ジョブインサイドプロジェクトの様子